

第 9 回会議で出された主な意見

【部活動の振興や体力向上の方策について】

(部活動の振興に関する視点)

部活動は人間形成に重要であると思う。部活動は、結果を出すだけではなくて、人との触れ合い、目標へ向かうための努力、そして思いどおりにならないことに直面する。

部活動においては、何がしたいか、何ができそうかを考えてそれを見つける手伝い、手引きをして人間力を鍛えることができるのではないかな。

部活動活性化の具体例として、競技に詳しい現役ではなくリタイアした方や、ボランティアで指導する、あるいは指導してくれる人材に頼るといったのも一つの方法だと思う。本職はミュージシャンの方が、東京の区立中学の女子テニス部のコーチになられているが、部活動は大変盛り上がり、最終的には本になるほどの成果が得られている。

外部からの指導者を受け入れるシステムの構築として、ギブ・アンド・テイクの人材を探し、北九州市独自の人材発掘システムを構築できないものかと考えている。市町村や地域の競技団体との連携をとるのも一つの方法ではないかな。

部活動では準備体操をしているが、指導者には最低限の知識が必要である。例えば、ランニングで体を温め、その後成長期特有の障害予防のため、ストレッチと、そのスポーツ特有の専門的な体操を行う。整理体操においては、運動で溜まった代謝物を肝臓や腎臓などに戻して処理するためのランニングと、障害予防のためのストレッチが必要と考えている。

スカモンの発育曲線を見ると体は一様に発達していないことが分かると思う。したがって、発達に合わせて刺激を与えた方が能力は伸びやすい。また、伸びやすい能力の時期は変化するということも忘れないでほしい。

子どもは、遊びの中でいろいろな運動能力を付けている。鬼ごっこや缶けりなど、いろいろな遊びの中では、走る能力、投げる能力なども加わっている。ケンケンなどはバランス感覚も発達しているし、集団で遊ぶとなるとリーダーシップを取る、協調性が要るなど、そういったことも重要なことになってくる。

北九州の中学校の部活動は盛んであり、また、すそ野は広がっている。サポートのあり方によっては、どの分野も全国制覇は夢ではないと考えている。

部活動のあり方もいろいろあっていいと思う。全生徒、全員部活を目指している学校もある。特色のある部活動も大切にすべきと考えている。

北九州市の部活動でインターハイなどを狙う場合、例えば、柔道では、小学校、中学校まではよいが、高校以上がない。強くなるという目標を目指すなら県外に出てしまうことになる。

スポーツをする動機付けというのは、友人からの誘い、また、両親からの薦めや兄弟などがしているといったことが要因になるのではないかな。

また、アニメも基本的な動機付けになっている。「キャプテン翼」を見てサッカーを、「巨人の星」を見て野球を、「姿三四郎」見て柔道を始めるなどのことがあっている。部活動については、教員が大量採用された頃から、部活動を担当しなくてもいいといったような風潮が出てきてしまい、その後、学校現場の中で部活動を担当する教員が少なくなってきた。

「教育日本一」と掲げるならば、極端な例ではあるが、新規に教員を採用する際に、一定期間必ず部活を担当する、などのことができれば部活動は存続していくと思う。中学校の場合は、部活動の中で子どもたちと接触すると人間関係もできてくるので、そういうシステムを作れないかという思いがしている。

各学校に各種目の先生、指導者を持っていくということは基本的に難しい。子どもたちにとっては、指導者次第だと思う。スポーツでは、教育者や指導者に人間性や情熱をたくさん持っている方が必要ではないかと思う。

(体力向上に関する視点)

スポーツにおいては、体を動かすことに興味を持ってもらう上で、子どもたちの感性を刺激することが大切だと思う。その中で本物を見る、触れる、感じるということは、子どもたちの何か、どこかを動かすことになることは間違いないと思う。

子どもたちには自分なりの目標設定を達成することに意味があるということを教えることが大切であると思う。

子どもたちが少しでもスポーツ・運動に興味を持ち、その楽しさを実感できれば、それが体力向上や生活習慣定着に役立つと思う。大切なことは、子どもたちが楽しいと感じてくれることであり、楽しくないと長続きしない。うまくいかないことも含めて楽しいと気付かせることが大人の役割であり、その適切な人材を提供するシステムづくりがこれから大切になってくると思う。

体力の低下は、平成の初めぐらいから言われており、運動する人としらない人との2極化が指摘されている。北九州市は全国平均より低いレベルにあるが、問題なのは全国平均より低いというよりも、前の世代より体力が低下しているところにあると思う。

都市化、車社会が遊び場を消失させて、テレビゲームなどで運動不足になり、その結果として子どもの体力、運動能力の低下が出てきているという指摘がなされている。

トレーニング効果を出すには、過負荷の原理がある。現状より少し高めの負荷をかけ、その後休養することによって、心身の生体機能が上がる。その負荷のかけ方が指導者に最も問われるところである。スポーツ障害を出さずに効果をあげるには、それなりの知識が必要で、身体の生理機能が適応できる限界を見極める必要がある。この限界については、気温や体調などの諸条件により変化するという事も認識しておく必要がある。トレーニング効果をあげるためには休養も重要である。運動により、多かれ少なかれ体は壊れている。体を修復することにより強靱な体になっていくので、体を整備するため、また、脳の神経回路を整備するために週1～2回程度の休養が必要であると思う。

なお、ケアも必要で、準備体操等を行うことはもちろん、その内容が大事である。子どもは、遊びの中でいろいろな運動能力を付けている。鬼ごっこや、缶けり、ケンケンや集団で遊ぶなどの機会は、もう少し小さい頃からあればいいと思う。体力低下というのは非常に深刻な問題で、学力低下以上に深刻だということがあり、北九州全体は、特に、この底上げをどうするかということも議論する必要がある。

(その他の視点)

スポーツの指導等をしている中で、今、一番欠けていることは、人間本来が持っている本能や感性の刺激、働きかけではないかと思う。利便性を追求するあまり、人間本来の能力が低下しているのではないか。「教育日本一」が目指すところは、人間が本来持つ特性、能力を向上させる環境を整えることではないか。

いろいろなスポーツに出会う、そして体験することで子どもたちの無限の好奇心を刺激することが大切だと思う。スポーツは、できたり、できなかつたり、できないことに立ち向かう気持ち、プロセスにおける挫折、達成感など、本来人間が持つべき感性を刺激して人間らしさを向上させることの手助けになると考えている。

部活動だけでなく、特色のある学校づくりを中心に教育活動そのものの活動も大切にする北九州でありたい。子どもたちのための教育活動、文化活動、体育活動を表彰し、奨励し、また、支援する必要がある。子どもは地域の宝、北九州の宝というならば、その観点から全市民参加型、つまり市民や企業からの募金活動などが必要ではないか。

幼稚園・保育園では、子どもたちが50mを何秒で走るかということより、「仲間と一緒に走ったら楽しいだろうな、走りたい」という意欲を育てることがベースになると思う。能力を競うよりも、意欲・心情といったものを育てることが大事であり、また、健康ということを大事にしていきたいと思う。

運動する機会、触れてみる機会が必要だと思う。ジュニアスポーツ体験教室の枠をもう少し広げていくのも一つの方策だと思う。

子どもたちの体力の問題に関わり、就学前から就学後も含め、一貫して、学校・幼稚園・保育所等で新しいプログラムを取り入れている。家庭や地域の中で遊ぶなど、その大切さについて、親や地域の協力の中での仕組みを作っていないと、奪われた環境を学校だけで背負い込んでいっても必ずしもそれが機能しないという状況になっている。

【学力向上の方策について】

（学校・幼稚園・保育園に関する視点）

学校教育法の改正により、幼稚園は「学校とは」の一番初めに位置付けられた。幼稚園では、「遊び」がキーポイントになるが、その遊びの中に心情、意欲、態度が養われるという、いろいろな学びの場面がある。

幼稚園教育の目的は、基本的な生活習慣を養う、規範意識の芽生えを養う、思考力の芽生えを養う、相手の話を理解しようとする態度を養う、豊かな感性と表現力の芽生えを養うという5項目がある。すべてその基礎的なところを養うという目標がある。遊びの中で体験する幼児の発見や気付きなど、「ルールは守らないと楽しくない」という納得・理解・工夫の姿の中にさまざまな学びの姿が見られてくる。そこには、まだ知的な好奇心、探求心、思考力や道徳性も同じように芽生えている。幼児期の学びの特性というものをその遊びの中でいろいろ目覚めていく、芽生えていく、それを幼児が主体的な活動に展開できるような遊びとして、先生が課題を設定する活動を取り込んでいくところが、先生の重要な役割になっている。

「言葉の力」を高めるために本市独自の「日本語大好き音読・暗唱ブック『ひまわり』」を作成されており、とてもいいものできたと感じた。

子どもたちは、くり返しの言葉など響きの良い音には興味を示す。子どもたちに教える物としてではなく環境の一つとして、日々繰り返すことで脳に刺激を与え、その刺激によってどんどん脳細胞が活動をはじめ、芽を出し・根を張り・絡み合い、さらにつながって、確かな能力が定着し、脳が育っていくと思う。子どもたちにとって、ちょっと難しいのではと思われるものでも、そのときに意味が分からなくても、繰り返しの刺激は、その後その言葉と出合った時に「ああ、こういうことだったんだなあ」と、脳の配線がまたつながっていくと思う。

現在、日本語大好き音読・暗唱ブック『ひまわり』が活用されている、本市では、「Aの基礎的な知識・理論」以上に「Bの活用する能力」に課題があるとされている。この種の音読などをすると、Aについては若干効果が見られるものの、やはり次の思考力を高めていくということまで行くには課題があるのではないかと。他都市も同様の課題にぶつかっている。

PISAが、2000年に読解力の検査を行っており、日本は、低いという結果が出ている。読解力を付けていくために、「言葉の力」を国語だけではなく、いろいろな教科の中で行おうとすることはよいが、その力を付けるために音読暗唱、反復練習を行うことを重要とするのではなく、もう少し落ち着いた施策を具体的に出していただきたい。資料の中に「研修の充実」という言葉が出ているが、全国と北九州市の比較をしたときに、小学校は全国に比べると非常に多く研修をやっており、中学校は少ないという結果が出ている。ここで考えるべきは、少ない中学校の研修をどうにかするというのではなく、研修そのものの在り方の問題として、校内研修の充実が必要という北九州市学力向上検証改善委員会の提言が生かされるべきではないかと思う。

現場が望むような、子どもの視点に立った学力向上、スポーツも楽しむ、勉強も楽しいというところから始まってほしい。そういう楽しむ学校づくりができるような報告書にしていきたいと思っている。

家庭学習や生活習慣の改善には、家庭の、親の認識というのが非常に大きい。生活習慣、家庭学習が必要など、またそれ以前に家庭とはどうあるべきかなどについて考えておかなければいけないということを、小学校高学年、中学、高校などの授業の中に内容として組み込んでいただくことも考えてもらいたい。

音読そのものを全体的に否定しているわけではないが、実際の学校現場の中での使われ方について、適正に使用されるよう注意と指導を行うべきであると思う。

音読・暗唱ブックについては、ノウハウやスキルに走りすぎる教員もいるのではないかと。市長が話した「フィンランド型の、修士号を持っているくらいの力のある教師」という方向からはずれてしまうことも懸念されるので、適切な指導が必要ではないかと思う。

(家庭・地域に関する視点)

家庭は、子どもを育てていくことすべての出発点であり、生活習慣、学力の基礎・基本を育てていく大切なところだと思っている。

家庭の教育力の向上の方策の一つとして、各PTAでは家庭教育学級を開催し、保護者と子育て・学校・家庭のことなどいろいろな話し合いをしている。講師の方を呼んだ勉強会なども行っているが、実際には保護者の集まりが少ないのも現実である。

北九州市では、子育て・親育ちのための「北九州市子どもを育てる10か条」の普及・啓発も行っており、これは子育ての基礎基本の大切な部分ではないかと思っている。

「言葉の力」を高めるためには、話を聞くことが楽しいという時期なので、絵本の読み聞かせにすごく力を入れている。先生だけではなく、保護者がボランティア活動で毎週来ている。お母さんたちの声で話を聞いたり、地域の方の声で話を聞いたりしながら、「いろいろな人のお話って楽しいな」ということで聞く楽しさを味合わせている。

家庭教育との連携では、やはり「早寝、早起き、朝ご飯」と思う。その言葉は、幼稚園の子どもにもとても耳に受け入れやすい。しかし、子どもだけではなく、保護者にもしっかり受け止めてもらい、しっかりご飯を食べることで、頭の、脳の動きがよくなっていくと思う。運動遊びも行っているが、いっぱい運動すると夜もぐっすり眠れて、朝方早く起きられるという、そういう仕組みのところを伝えている。いろいろな形で保護者にも呼び掛けて幼稚園と一体となって取り組むようにしている。

保護者である親も、もっともっと学校に足を運んで、子どもたちのことを知って欲しいと思う。また、PTA協議会でもお母さんたちで組織された母親委員会というものを開催している。その中でも、子どもたちの今の現状や課題がたくさん出てくる。そんな中でもいろいろな資料を基に、親も学習していきたいと思っている。

家庭・学校・地域においては、それぞれのところでの温度差というものがあ、皆同じとはいかないようにも思う。地域によつての違がいろいろあるという話を聞く。しかし、根本的な部分は同じだと思。その大事な根っこの部分も、親であり、保護者である大人たちみんなて大切に育ててあげることができれば、子どもたちがもっともつと変わっていくようにも思。

(その他の視点)

家庭との協力というが、家庭にも価値観の違など様々な考え方があると思。教師の技能により子どもは点数が取れるようになると思が、スポーツと同じようにそれは情熱に尽きると思。また、習う子どもたちの能力にもよるところがある。子どもは、それぞれに向いているものがあり、それを伸ばしてやればいいと思。読解力という場合に、理解する力もあるが、相手の気持ちをくみ取る力なども入っていると思。小さいときから生の人間の心地よい声を聞かせられた体験がないとしたら、その辺りから考え直していかなくてはならないのではないか。聞かれたことに対し、答えがくる。そういう応答性が小さいときから大事ではないかと思。「言葉の力」というところでは、理解してもら、納得、説得するという言葉のテクニックではなく、その人がどう行動しているかが、やはり言葉の中で理解してもらえるのではないかと思。子どもたちも、日頃の生活態度がその言葉が巧みに話せなくても、その行動によつて、仲間なり親なりが理解するのではないかと思。言葉だけではなく、正しい行動をしていくと、言葉にも説得力が出ると思。学校教育の中で中学校に来て、基本的なものの言い方とか、態度、それができていないことがあり、まず、家庭教育が大事だろうと思。ここでいう家庭教育の連携というのは、生活リズムを作れるような、生活習慣をきちんとする基礎的なものを連携していくということで、家庭と学校をある程度線引きすべきではないかと考えている。子どもたちが聞いたり読んだものをたくさん語り合う中で、「ああ、自分たちの表現では伝えきれない」とか、「あなたの言いたいことは、その言葉だけでは理解できない」というようなことを、子どもたちの場面の中でたくさん豊かに作れると、子どもたちがまた新しい言葉を作り直していくとか、過去使われていた言葉をもう一度取り戻していくという作業になっていくのではないかと思。